

氏 名 片岡 真伊

学位(専攻分野) 博士(学術)

学位記番号 総研大甲第 2099 号

学位授与の日付 2019 年 9 月 27 日

学位授与の要件 文化科学研究科 国際日本研究専攻
学位規則第6条第1項該当

学位論文題目 小説とノヴェルのあいだ—戦後期日本小説の英訳・出版現場
の探究—

論文審査委員 主 査 教授 牛村 圭
教授 坪井 秀人
教授 稲賀 繁美
所長 セシル 坂井
日仏会館フランス国立日本研究所
教授 新井 潤美
東京大学大学院人文社会系研究科

(様式3)

博士論文の要旨

氏名 片岡 真伊

論文題目 小説とノヴェルのあいだ ―戦後期日本小説の英訳・出版現場の探究―

第二次世界大戦後、アメリカの出版社が次々と日本の小説の英訳に乗り出し、同時代の日本小説を紹介する動きが活性化した。その原動力となったのが、アメリカのクノップフ社である。同社は一九五〇年代半ばから一九七〇年代にかけて「日本文学翻訳プログラム」を通じて、川端康成、谷崎潤一郎、三島由紀夫による小説を含む三十タイトル以上もの英訳を手がけた。クノップフ社の試みは、今日の海外における日本小説の受容基盤となった事情も関係し、日本研究、比較文学、翻訳学など各方面から研究対象として注目されてきた。だが従来の研究は、原文が英訳文においてどう省略、変化、誤訳されているのかを調べ上げること終始したものが大半を占め、英訳・編集現場にまで踏み込み、その変貌の理由を突き止めようとする研究はみられなかった。

その解決の糸口として本研究で用いたのが、出版社側の一次史料、クノップフ社のアーカイヴズである。翻訳者や編集者を含む英訳出版関係者たちの間で交わされた書簡、さらには事務手続きの書類や内部資料など、翻訳の企画立案から英訳、編集、校正、宣伝活動の様相を鮮やかに蘇らせる一次史料と共に、日本小説の原文と英訳文の比較検討を突き合わせ、本研究では、小説を英米圏に移すにあたり、編集者や翻訳者たちが、言語・文化・文学規範の隔差をどう跨ごうとしていたのか、その「あいだ」の実相を解明することを目指した。さらに本論では、英訳における変貌の結果、クノップフ社から刊行された英訳版日本小説がどう受容されたのか、今日に至るまでの移植先での受容や伝播の諸相についても追究している。

まず冒頭の章では、全体の見取り図を提供するため、クノップフ社の編集長で、日本文学翻訳プログラムの立案者でもあるハロルド・シュトラウス(1907-1975)に焦点を当て、翻訳事業の設立経緯や、日本文学翻訳プログラムにおける翻訳状況の変遷、さらに当時の翻訳・出版現場の様相を素描した。

戦後期日本小説の英訳・出版現場を探究するにあたり押さえておくべきこれらの前提を踏まえたうえで、第I部「異文化接触の磁場形成」では、小説を英米圏へ移すにあたり、言語・文化・文学規範の隔差を跨ぐために編集・出版現場でなされた工夫、変更の実態に迫った。第一章では、想定読者が呈しかねない拒絶反応に対する防御装置、本文に先立つ導入として作成された「序文」をとりあげ、その生成の系譜を辿った。日本文学翻訳プログラムの第一作目である大佛次郎の『帰郷』(*Homecoming*, 1955)、それに継ぐ谷崎潤一郎の『蓼喰う虫』(*Some Prefer Nettles*, 1955)の序文生成過程に光をあて、同翻訳プログラム初期段階において、序文作成者が日本の小説のいかなる部分に異質性を見出し、それをアメリカの読者にどう紹介していたのかを読み解いている。つづく第二章では、『蓼喰う虫』の会話を英語に移した際に生じる事態・混乱の收拾経緯に目を向け、原典の特徴が消失した事件を明らかにした。さらに、谷崎の小説とダイアローグの名手とされるイギリスの作家

アイヴィー・コンプトン＝バーネットのノヴェルとの比較を通じて、会話部分をノヴェルの「ダイアログ」として読んだ際に生じる異和感を明るみにし、小説における「会話部分」とノヴェルにおける「ダイアログ」との根本的な差異を浮き彫りにした。そして第三章では、大岡昇平『野火』(*Fires on the Plain*, 1957)の翻訳・編集現場でなされた、小説の構造をも揺るがす大幅な変更、エンディングに至るまでの流れの書き換えや、サスペンスの要素をめぐる改変に着目するとともに、そこから浮かびあがる英訳現場のもう一つの側面、日本の小説の英訳だからこそ浮き彫りにされる「米語訳」と「英語訳」とのあいだに、いかなる編集の相異があったのかという問いにまで踏み込んだ。

第II部「原著の変貌と、その伝播の行方を辿って」では、第I部とは趣向を変え、原典が英訳・編集・出版過程、さらにはその受容過程を通じて変貌することを前提とし、その背後にある改変や調整、またその諸要因を論証している。まず第四章では、英語で読んだ時と原典で読んだ時とで異なる印象が生まれる主要因の一つ、視点と時制をめぐる調整・変更に光をあてた。谷崎潤一郎『細雪』(*The Makioka Sisters*, 1957)に登場する一場面、過去と現在、夢と現実が錯綜する蛍狩りの場面において、翻訳者エドワード・G・サイデンステッカー(1921-2007)とクノップ社の編集者たちが、それらの問題にどう対峙していたのかを考察し、日本語から英語への文学翻訳において長年論議が重ねられてきた、視点と時制に関わる翻訳問題を問い直している。第五章は、谷崎の『細雪』や川端康成の『千羽鶴』(*Thousand Cranes*, 1958)などの英訳に焦点をあて、原典と英訳版とでは異なる表情を見せる三要素、すなわちタイトルや表紙カバー、そして著者イメージの劇的な変貌の陰に潜む経緯や、その変容の背後にある文化的隔差を読み取っている。第六章では、第II部の総括として、川端康成の『名人』の英訳化(*The Master of Go*, 1972)に焦点をあて、その翻訳企画の立案から英訳、編集、そしてその受容に至るまでの流れを辿り、一つの作品が英訳されてゆく作業の業務過程や、出版された英訳の伝播に加わった内的、外的力学を交えつつ、小説の翻訳に関わるダイナミズムを写し出した。

以上、各章での考察を受け、第III部「異質性をめぐる葛藤から翻訳が拓く可能性へ」では、翻訳者や編集者たちが翻訳・編集過程において直面した葛藤の領域に、さらに深く分け入る。第七章では、三島由紀夫の『金閣寺』(*The Temple of the Golden Pavilion*, 1959)における隠喩表現の翻訳をめぐる、翻訳者アイヴァン・モリス(1925-1976)と編集者シュトラウスのあいだで繰り広げられる指摘、反駁、自己弁護、指南、応酬などの編集劇を通じて、両者の読みの深淺、さらには彼らが直面した葛藤の実像を描き出した。つづく第八章では、躊躇なく大幅な改変が行われた大佛次郎の『旅路』(*The Journey*, 1960)の英訳編集現場に目を向け、原典の特徴や味わいが強く滲み出る箇所の数々があえて削除、改変された内実を解明し、翻訳文学としての脆さを孕んでいたにもかかわらず、『旅路』が英訳された経緯を示した。第III部の締めくくりとなる第九章では、イギリスの小説家・批評家であるアンガス・ウィルソン(1913-1991)と日本小説の英訳との関わりにスポットライトをあて、日本の小説(とりわけ谷崎の『細雪』)が英訳されたがゆえに切り拓かれた、思わぬ可能性について考察をめぐらせた。

終章では、各章での考察から明らかとなった事実を改めて咀嚼したうえで、日本小説を英訳するにあたり、シュトラウスや翻訳者たちが直面した問題の根底にあったものとは一体何であったのか、その葛藤の根源や問題の焦点を究明しようと試みた。

以上の考察を通じて明らかとなったのは、従来見逃されてきた、訳文の生成段階における編集者の介入の具体相である。その編集手法の取捨選択からは、移植先における読者の異質性の許容限界を図りつつ、常に「異質性」と「同質性」の狭間を行き来するシュトラウスの姿が浮かび上がった。それと共に、これまで作家や研究者たちが掴み切ることのできなかった日本の「小説」と英語の「ノヴェル」の各特色や差異を含む、その境界面の実相が解明された。両者の噛み合わせの悪さが明確となる一方、本論では、その差異こそが時に翻訳移植を通じて作家の発想源になるという、日本小説の英訳が新たに切り拓く局面を示すに至った。

Results of the doctoral thesis screening
博士論文審査結果Name in Full
氏名 片岡 真伊

論文題目 小説とノヴェルのあいだ—戦後期日本小説の英訳・出版現場の探究—

(論文審査結果) [2019 年 8 月 27 日実施]

第二次大戦後の英語圏において日本文学の翻訳・刊行が盛んになるなか、その事業を積極的に推進したのはアメリカのクノッフ社 (Alfred A. Knopf, Inc.) における同時代の日本文学翻訳プログラムだった。本論文は、この翻訳プログラムに焦点をあて、同社のアーカイブズ由来の大量の諸資料、とりわけ翻訳者と編集者との間で交わされた書簡の精読を通して、訳稿が決定するまでの過程を丹念に再構築し、その過程には日英両言語の間に看取される語学上の諸問題にとどまらず、文化や文学規範に関わるさまざまな隔差を乗り越えようとする試みが絶えず存在していたことを、そして刊行された英訳日本小説がどのような反応を引き起こしたかを、具体的に解明することを企図した意欲作である。

本論文導入部分にあたる「はじめに」及び「序章」においては、日本文学の翻訳が孕む問題、とりわけ誤訳は、畢竟翻訳者個人の誤解や語学力の欠如に帰されがちな傾向に対し、商業出版の翻訳現場において一翻訳者の独断で原典からの省略や誤訳をも含む訳稿が出来上がることへの疑念を、本研究の出発点として掲げている。クノッフ社の膨大な量のアーカイブズや同社の翻訳を数多く担当したエドワード・サイデンステッカー (Edward Seidensticker) にまつわる諸資料を読み解くことにより、クノッフ社では日本文学翻訳プログラムの立案者であるハロルド・シュトラウス (Harold Strauss) が率いるかなり大がかりな編集現場が存在し、翻訳者はもとより原著者や訳稿への意見を求められる閲読者とも緊密なやり取りをするなかで訳稿が出来上がっていったというプロセスを突きとめている。このクノッフ社の編集・出版現場に考証を加えた唯一の先行研究は社会学的な分析を旨とし、訳文自体の改変が生み出す文学的な側面への論及を欠いていることを確認したうえで、日本の小説の英訳出版現場の内実を諸資料の精読から読み解き、言語・文化・文学規範の隔差をいかに跨ごうとしたのかについての検証に以後の章において取り組む基本姿勢を明らかにする。

「異文化接触の磁場形成」と題する第 I 部では、日本の小説を英米語圏へ翻訳移入する際に編集・出版現場でとられた様々な工夫や変更の実態を取り上げる。第 1 章は、当該翻訳プログラムの第 1 作である大佛次郎『帰郷』 (英訳 *Homecoming*, 1955)、2 作目の谷崎潤一郎『蓼食ふ虫』 (*Some Prefer Nettles*, 1955) に付された「序文」に日英両語間の隔差を跨ごうとする意図、すなわちアメリカでの想定される英語圏読者への配慮の跡を検証する。英語訳に「序文」を付す先例は、戦前期刊行の鶴見祐輔『母』 (*The Mother*, 1932) に見られ、鶴見の作に「序文」を提案したチャールズ・ビアード (Charles Beard) 自身からシュトラウスはこの「序文」を付す案を得ていたという事実を発掘する。第 2 章は、訳者自身さして問題はなかったと公言するのとは裏腹に、『蓼食ふ虫』の翻訳現場に存在した会話部分をめぐって生起していた問題を取り上げ、日本語小説の「会話」と英語の *novel* のなかの *dialogue* との役割の差、相性の悪さが生み出す問題の根幹を考察の対象とする。大岡昇平『野火』 (*Fires on the Plain*, 1957) を扱う第 3 章は、「完全なる連続性」を求める西洋の文学規範に照らしてなされた改変、「結論部」*resolution* の大幅な再構成に、大岡がのちに不承諾を表明した件を検討する。その背後には、米英ふたつの出版社の間で「米語訳」と

「英語訳」に関わる翻訳理念上の差異があったことをも指摘する。

第Ⅱ部「原著の変貌と、その伝播の行方を巡って」は、原典とは大きく異なる様相や性質を帯びた英訳作品を対象とし、その改変の諸要因を探索することを主眼とする。第4章は谷崎の『細雪』(*The Makioka Sisters*, 1957)を取り上げ、日米両語間にある「叙述の視点」や「時制」をめぐる差異が、翻訳編集現場で生起させた混乱とその結果に論及する。第5章はテキスト本文から離れ、原著とは大きく異なる英訳タイトル(『細雪』から *The Makioka Sisters* へ)やブックジャケット(『千羽鶴』)、さらには原著者の写真(川端康成や安部公房など)の選択の背景や効用に論点を広げ、背後にはトーマス・マンの大作『ブッデンブローグ家の人々』にあやかるとなる広告戦略、ノーベル文学賞を視野に入れての作家の売り出し、大衆読者向けの販売意図などを具体的に指摘する。囲碁の名人を描く川端康成『名人』(*The Master of GO*, 1972)を論じる第6章は、囲碁という当時の北米ではあまり親しみのない題材の扱いを検討する。欧米の囲碁愛好者から翻訳の不備が指摘される一方、そののち海外の複数の創作にこの翻訳が裨益した経緯、また翻訳完成直前に原著者の自裁があったため、川端自身が別の「名人」イメージを喚起する存在になりえたという予期せぬ展開、について論及が加えられている。

以上の諸章での論述を踏まえ、第Ⅲ部「異質性をめぐる葛藤から翻訳が拓く可能性へ」は、翻訳現場の内実さらに踏み込み、翻訳者、編集者、原著者が日英間の言語や文学規範のあいだで経験した葛藤、そしてその対峙の様相を扱う。第7章は、三島由紀夫の『金閣寺』(*The Temple of the Golden Pavilion*, 1959)の翻訳過程に見られる、原典の隠喩表現をめぐる翻訳者と編集者との間に見られた時に激しいやり取りを読み解くことから、むしろ編集者側の読みの方が正鵠を得ていたことを解き明かしている。大幅な改変が施された大佛次郎『旅路』(*The Journey*, 1960)を取り上げる第8章は、削除された箇所原典の味わいがあったことを確認した上で、削除の背後にある編集現場の葛藤を指摘する。続く第9章では、英国人作家アンガス・ウィルソン(Angus Wilson)へ日本小説の英訳がもたらした影響を取り上げ、『細雪』の英訳末尾の一文が生み出した予期せぬ反響の軌跡をウィルソンの諸論考のなかに検証し、第Ⅲ部を締めくくる。

終章では本研究を総括しつつ、従前の諸研究がサイデンステッカーやモリスといった翻訳者の翻訳手法の検討にとどまっていたことを今一度指摘した上で、その翻訳手法がとられるに至った経緯を解明することの重要性を改めて力説する。もちろんその解明は、ハロルド・シュトラウスが率いるクノップ社の翻訳工房とも呼べる組織にまつわる諸資料の調査によるのみ可能となったことも再説される。

400字詰め原稿用紙で1000枚に垂んとする本論文は、日本敗戦後の英米語圏における日本現代文学の翻訳がいかなる環境でなされたかについての初めての包括的な研究であり、その意義は以下のように列挙できよう。①各地のアーカイヴズで発掘した往復書簡やその他の史料を基礎に、翻訳過程での取舍選択やその背景を明確に再構築した。②編集企画における作品選定から内容の取舍選択、翻訳方針を巡る議論や応酬を丹念に跡付け、③原典と翻訳との綿密なテキストの比較を施し、従前の研究では見落とされてきた、思わぬ誤訳や裁断(原典の一部削除)の発生原因を特定し、④そこに英・米間の言語的価値観の対立、日本における小説の通念と英語圏における *novel* との違いをも突き止め、さらに ⑤日本の小説の特異性に対するアンガス・ウィルソンの評価、川端の作品の国際的評価の形成過程とノーベル文学賞受賞後の翻訳姿勢の変化、といった局面にまで探索を進めている。加えて、⑥誤訳や改変は必ずしも翻訳にとって損失となるのではなく、誤読や逸脱が思わぬ派生効果を生んで国際的な評価にも結びつく顛末をも解き明かしている。⑦翻訳を通して原典がもつ新たな可能性が開発されてゆく現場を再生し、文学社会学に新たな展望を拓いている。⑧断片的にしか残存しない翻訳未定稿を厳密な史料批判によって推測して復元した手腕、推論過程を平易で明快な文体で説得力ある論述に仕上げた力量は、歴史研究の視

点からも高く評価できる。大きな学術的意義を見出すことができる学際性・国際性を兼ね備えた論考であり、向後日本文学の英訳研究にとどまらず欧米語と非欧米語との翻訳学研究、さらに文化接触論研究のうえでも参照することが不可欠な重要な研究となるであろうことは論を俟たない。

もつとも、達意の叙述の中にもやや不自然な表現があること、引用される大量の英文資料の解釈に時折ささいな誤読が見られること、編集者が関係者に送付した書簡や編集室での紙片メモ、あるいはブックジャケットなどを、ジェラルド・ジュネット（Gérard Genette）が言うパラテキスト（paratexte）として総括的に定義する可能性を検討すべきこと、日米両国に跨る本研究のテーマを考える際に不可欠である戦後の国際政治状況の検討がやや物足りないこと、緻密な論証を旨とするなかで時折やや安易な一般化がなされていること、翻訳者の社会的地位の向上が編集の場へ作用している可能性についての探求がほしいこと、等々の修正や加筆を要する課題はある。しかしながらこれら諸点は本論文をさらに発展させるため向後の参考とすべき類のものであり、本論文の意義をいささかも減じるものではない。

以上により、審査委員会は全員一致で、本論文を博士（学術）の学位を授与するにふさわしいものと判定した。
